

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2019年3月27日 (Vol.152)

「ピーテル・ブリューゲル、その絵画と俳句」

「ピーテル・ブリューゲル、その絵画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Petro_Bruegel_Pictori.png

その作品を一見すると、ユーモラスな群像画に思わず頬をゆるめてしましますが、その絵にどんな意味が隠されているのかを考えはじめると、抜け出せない深みにはまってしまいうピーテル・ブリューゲル（父）（1525年ころから1530年ころ生、1569年没）の絵。

「季語に遊ぶ」では前4回、西洋美術と俳句の組み合わせを試み、ご好評をいただきました。第5回の今回は『バベルの塔』『雪中の狩人』『ネーデルラントの諺』『農民の婚宴』など聖書や中世の諺を題材にして、現代にも通じるテーマを愛情と諷刺をこめて描いたピーテル・ブリューゲル。そんな彼の作品を制作時期順に掲載し、その作品に合う俳句を選んでみました。お楽しみ下さい。

作品の下に制作時期 | 作品詳細 | 所在を記載しています。

俳句の下に作者、生年・没年を記載しています。

1. 『ネーデルラントの諺』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pieter_Brueghel_the_Elder_-_The_Dutch_Proverbs_-_Google_Art_Project.jpg

1559年 | 油彩、117 × 163 cm | ベルリン美術館

ネーデルラントは低地の国を意味し、現在のオランダ、ベルギー、ルクセンブルクの3か国を指します。

当時のネーデルラントの庶民のあいだでは、機知に富む諺が好まれていました。

この絵に描かれた諺は 85 にものぼり、人間の愚行、失敗、弱点、欺瞞の行為などが満ちあふれています。

例えば、前方中央では夫に青いマントを着せている様子が描かれていますが、これはこの絵の代表的な諺です。

当時、青は「裏切り」「欺瞞」を象徴する色と理解されていきましたので、「夫に青いマントを着せる」は夫を裏切った妻の行為を意味しています。

杖を必要とする年老いた夫と若々しい妻という「不釣り合いなカップル」を強調し、夫への不満を抱く妻を表現しています。

その右横の「豚の前に薔薇を撒(ま)く」は価値を理解できないものに施す行為で、その下の「うまく世渡りするなら、身がかがねばならぬ」は出世のためには悪がしこい手段を使うことなど、この絵には 100 人近い人物が百科全書的な「ことわざ辞典」として描かれています。

「青いマント」の箇所からここでは道ならぬ恋、不倫の香りのする句を選んでみました。

羅や人悲します恋をして (羅=うすもの)

鈴木真砂女(すずき まさじょ) (1906-2003)

季語<羅>で晩夏

花冷のちがふ乳房に逢ひにゆく (花冷=はなびえ)

眞鍋呉夫(まなべ くれお) (1920-2012)

季語<花冷>で晩春

会ひたくて逢ひたくて踏む薄氷

黛まどか(まゆずみ まどか) (1962-)

季語<薄氷>で初春

2. 『謝肉祭と四旬節の喧嘩』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pieter_Bruegel_d._%C3%84.066.jpg

1559年 | 油彩、オーク、118 × 164 cm | ウィーン美術史美術館

この絵はキリスト教における復活祭の前の二つの行事を対照的に描いています。
飽食に明けくれる謝肉祭と節食・祈り・慈善を通した悔い改めを心がける四旬節の戦いを。
謝肉祭の時期はその年の復活祭の日から逆算されます。
復活祭は、春分を過ぎて最初の満月直後の日曜日と設定されていて、年によってその日は変わってきます。
復活祭の前の週を聖週間と呼び、それまでの日曜日を除いた四十日間を四旬節（旬は十日間）といいます。
その四旬節に入る前が謝肉祭です。
謝肉祭に続く四旬節が、慎ましい節制の日々であればあるほど、謝肉祭でのほめ外しが許されます。
代表的なものはリオのカーニバルによってその様子を知ることができますが、その歌・踊り・道化・仮面劇・行列などが秩序と混乱の中で乱舞し、民衆のエネルギーが爆発します。
この絵では、中央より左下には「樽に跨る肥満体の男」が描かれていますが、彼は謝肉祭の代表格で服は青です。
青は「ネーデルラントの諺」でも「欺瞞」の色でした。
それに対して、絵の中央より右下には、鯨（にしん）を乗せたしゃもじを持つやせた老婆が節食を心がける四旬節の代表です。
浮かれ騒ぐ謝肉祭と肉を断ち禁欲する四旬節を擬人化して、どちらかというとな謝肉祭側に鋭い諷刺を盛りこんで描いています。
ちなみに四旬節の第一日目は灰の水曜日と呼ばれ、信者は神の方へ心向ける（回心）しるしとして、荒布をまとい、灰をかぶります。
灰は死を連想させますが、同時に新しい命の誕生を予感させるものとされています。

ここでは謝肉祭と四旬節を詠んだ句を選んでみました。

素顔さへ仮面にみゆる謝肉祭

石原八東(いしはら やつか) (1919-1998)

季語<謝肉祭>で初春

尖塔へ葛のぼりゆく四旬節（葛＝くず）

大島民郎(おおしま たみろう) (1922-2007)

季語<四旬節>で仲春

浦上に青文字咲けり四旬節

築城百々平(ついき どどへい) (1922-)

3. 『悪女フリート』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pieter_Bruegel_d._%C3%84._023.jpg

1562年 | パネルに油彩、115 × 161 cm | マイヤー・ファン・デン・ベルグ美術館

「フリート」は16世紀では「意地悪女」「がみがみ怒る女」に対する軽蔑語として使われていて、現在でもオランダの一部地域では「悪い女」の代名詞です。

しかし、もともとの「フリート」はギリシャ神話に登場する悪魔を退治した「復讐の女神」聖女マルガリータ（蘭名でマルフリート）の愛称です。

この絵では、鉄兜の老女が、赤く燃えさかる空の下、右手に剣を持ち、左手には宝石箱、金、銀の皿、台所用品などを抱え、地獄に向かって突撃しています。

彼女は「地獄で悪魔からも略奪し、無傷で戻ってくる」という諺で恐れられたフリートで、「強い女」「悪女」「悪妻」の象徴です。

その右下では手下の女たちが悪魔を組み敷いています。

このような強い女性は「ネーデルラントの諺」の左下にも描かれています。

フリートの左側には大きな顔の人間の口のようなものがありますが、これが地獄の入口です。

その眉毛はムクドリの罨用の壺をならべ、脛は戸板、鼻にはリングが施され、その尻からはお金が出て、女たちはそれを食べています。

この絵は当時の女性に向けられた暴力、侮辱に対する女性たちの一斉蜂起を表現しているという見方と、奇妙な生物たちは男性の具現化で、強い妻に牛耳られる夫たちの「現世の地獄」という見方があります。

あなたはどちらだと感じますか？

ここでは強い女性、激しい女性が詠んだ句を選んでみました。

呪ふ人は好きな人なり紅芙蓉

長谷川かな女(はせがわ かなじょ) (1887-1969)

季語<紅芙蓉>で初秋

われにつきるしサタン離れぬ曼珠沙華（曼珠沙華＝まんじゅしゃげ）

杉田久女(すぎた ひさじょ) (1890-1946)

季語<曼珠沙華>で仲秋

鞆は漕ぐべし愛は奪ふべし（鞆＝しゅうせん、ぶらんこのこと）

三橋鷹女(みつはし たかじょ) (1899-1972)

季語<鞆>で三春

4. 『バベルの塔』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pieter_Bruegel_the_Elder_-_The_Tower_of_Babel_%28Vienna%29_-_Google_Art_Project_-_edited.jpg

1563年 | パネルに油彩、114 × 155 cm | ウィーン美術史美術館

旧約聖書の『創世記』に登場する巨大な塔で、ノアの洪水が去った後、人々は「どんな計画も完成できないはずはない」と信じ、天まで届く塔を作ろうとしました。

だが、神は人間のこのような思い上がり、傲慢（ごうまん）さをくじくため、建設中の職人たちの言葉を混乱させ、塔の建設は中断してしまうという物語です。

ブリューゲルは生涯で3点の『バベルの塔』を制作したとされています。

ここでは現存する2点のうち有名な1563年のウィーン美術史美術館のいわゆる「大バベル」の方を取りあげます。

ウィーンの「大バベル」は岩山を利用した塔で、ブリューゲルは建築技術者として現場監督の経験があるのではないかと思わせるほどの正確な知識で建設過程を描いています。

近づいて見ると数百人も建設労働者が蟻のように働いているのが見えてきます。

石の切り出し、船によるレンガの運搬、海岸近くのモルタル作り、滑車やクレーンによる石のひき揚げ、塔にかけられた足場や枠組みなど。

この驚異の細部描写が「幻想の塔」に現実味を与えています。

とはいえ、すべてが正確に描かれているわけではありません。

このような建築物は下の部分から徐々に上に築いていかなければならないのですが、絵では左右で工事の進行が異なっていて、建設中というよりも崩壊しかかっているように見えます。

ブリューゲルは当時の最高の建築技術を伝えながら、完成不可能なバベルの塔についての聖書の記述を構築上の矛盾を示すことで表現したかったのではないかと考えられます。

ちなみに、日本でもバブル期に高さ10kmの「東京バベルタワー」が計画されましたが、3,000兆円（2019年度の日本の国家予算が101兆円として、その30年分）もの巨額資金が必要とされ断念しました。

ここでは京都、奈良の名刹（めいさつ）と「バベルの塔」を詠んだ句を選んでみました。

塔ばかり見えて東寺は夏木立

小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）

季語＜夏木立＞で三夏

斑鳩や良夜の塔のまぎれなし

（斑鳩=いかるが、斑鳩には聖徳太子とその一族のゆかりの仏塔、法隆寺の五重の塔、法起寺、法輪寺の三重の塔があります。）（良夜=りょうや、月の明るい夜のことで、季語としては陰暦八月十五日の中秋の名月の夜をいいます。）

角川春樹（かどかわ はるき）（1942-）

季語＜良夜＞で仲秋

バベルの塔簾かけたる窓もなし（簾=すだれ）

小川軽舟（おがわ けいしゅう）（1961-）

季語＜簾＞で三夏

5. 『雪中の狩人』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pieter_Bruegel_d._%C3%84._106b.jpg
1565年 | 油彩、キャンバス、117 × 162 cm | ウィーン美術史美術館

ブリューゲル最高傑作の一つ。

季節ごとのシリーズとして制作された連作月曆画（カレンダー）のうちの1点で季節は12月-1月にあたります。

冬空の下、小高い丘から狩人たちが帰ってきています。

猟犬の数は13匹と不吉な数で不猟を暗示し、案の定獲物はおそらく狐1匹。

その後姿は、厳しい冷気と少なかつた獲物の両方からか、彼らの足どりは重く、猟犬たちもうなだれているように見えます。

高い地点から俯瞰している構図は左手前の近景に狩人や犬を配置し、中景に農村とスケートやホッケーなどに興じる村人、遠景として右奥に険しい山岳を配して遠近法を巧みに用いています。

また、狩人と犬の左上には「鹿亭（Dir is In den Hert）」の看板が傾き落ちそうになり、その店の前では豚の毛焼きが行なわれ、右側の丘の下の川では橇（そり）遊び、その上の氷の上ではアイススケート、ホッケー、カーリングなどを行っている様子など、細密画のように描写しています。

当時の画家たちの多くが、聖書や神話に登場する英雄たちを描いたのに対し、ブリューゲルはこの作品に限らず庶民の風俗を題材にし、その愚直な存在を描き出しています。

ここでは冬の季語である「猟犬」を詠んだ句を選んでみました。

狩小屋の夜明なりけり犬の鈴

小林一茶(こばやし いっさ) (1763-1828)

蘆分けの舳に立てる猟の犬（蘆分け＝あしわけ）（舳＝へさき）

後藤夜半(ごとう やはん) (1895-1976)

縫へと言ふ猟犬の腹裂けたるを

谷口智行(たにぐち ともゆき) (1958-)

6. 『怠け者の天国』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pieter_Bruegel_d._%C3%84_037.jpg

1567年 | パネル（木板）に油彩、52 × 78 cm | アルテ・ピナコテーク（ドイツの国立美術館）

食べものが棚から落ちてくるのを寝そべったままで待っている学者、気持ちよく眠る兵士と農夫、食べものが口に飛びこむのを待つ騎士など職業は彼らの持ち物と服装によってわかりますが、一様に肉つきの良い体です。

パンケーキのようなものが並べられている屋根、庭を歩く豚はナイフが刺してあり、ローストチキンはすぐに食べられるように皿にその身を置き、ゆで玉子は二本足で歩いてきています。

また、垣根はソーセージで作られ、遠景にはミルクの川とお粥の山があり、一人の男がその山に首をつっこんでいます。

彼らがその胃袋を満たした後は、無気力になり、次なる空腹時をただ漫然と待っています。

働きもしないで惰眠をむさぼり、しかも食べものは豊富にある。

これが『怠け者の天国』？

空腹に耐えることなく、いつでも欲しいものを口にするのできる環境—それは果して天国なのでしょうか。

ブリューゲルは怠惰、美食、大食の先にあるのは希望のない行き止まりではないのかと暗示するために、彼らの表情を冴えなくしています。

ひるがえって現在の日本では、食料の 60 %以上を輸入によって賄っているにもかかわらず、恵方巻きの処分など、外食産業やコンビニ、宴会などで、場所によっては半分以上も捨てられています。

そんな日本の現状をブリューゲルならどのような絵画で表現するのでしょうか。

ここでは「飽食」を詠んだ句を取りあげました。

暖衣して飽食飯盛山を踏む（暖衣＝だんい）

平畑静塔（ひらはた せいとう）（1905-1997）

季語＜暖衣＞を厚着と解し三冬

飽食の世に生れたるきりぎりす

佐藤鬼房（さとう おにふさ）（1919-2002）

季語＜きりぎりす＞で初秋

鵜飼見る鮎を飽食したる後

鷹羽狩行（たかは しゅぎょう）（1930-）

季語＜鵜飼＞、＜鮎＞でともに三夏

7. 『農民の婚宴』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pieter_Bruegel_d._%C3%84._011.jpg
1568年 | パネル（木板）に油彩、114 × 163 cm | ウィーン美術史美術館

この作品は中学校の教科書にも載っているブリューゲルの作品のなかでも、よく知られた農民画です。当時、ブリューゲルが暮らしていたフランドル地方（現在のオランダ南部、ベルギー西部、フランス北部にかけての地域）では、秋の収穫の仕事が一段落すると、婚礼の時節となります。壁には緑の垂れ幕がかかげられ、そこに吊された冠の下では主役の花嫁が座っています。その右横には交差した麦の束がレーキ（農具）で取りつけられ、ここが農家の納屋であることを示しています。

戸口には祝いの人びとがひしめきあっています。

婚宴といえば、ご馳走とお酒。

外した扉をお盆がわりにして、ブレイ（ライ麦やオート麦などで作られたこってりとしたお粥。白いのはミルク入り、黄色いのはサフラン入り）が運ばれています。

前景の子供が皿の残りのブレイを指でとり、しゃぶっていることから、中身は蜂蜜などで甘い味なのでしょう。

さて、花婿はどこにいますか。

いろいろな解釈がありますが、前景左側でブドウ酒（あるいはビール）をついでいる人か、同じく前景で給仕の運ぶブレイを配っている赤い帽子の若者が花婿だと考えられています。

ブリューゲルはこの作品で大勢の祝い客である農民たちの顔を描くために、テーブルを対角線上に位置づけています。

彼は生涯を通じ、人間一人ひとり、特に誠実な生産者である農民に関心を持ち、彼らの生活、農作業、行事に敬意を持って描いていたと感じられます。

それが「農民画家ブリューゲル」と呼ばれる所以なのでしょう。

ここでは婚礼、嫁入りを詠んだ句を選んでみました。

嫁入りの行列囃せ鳴子引け（囃せ=はやせ）（鳴子=なるこ、穀物などを守るためのしかけ）

嶋田青峰（しまだ せいほう）（1882-1944）

季語<鳴子>で三秋

今年藁みどりほのかに新娶り（今年藁=ことしわら）（新娶り=にいめとり）

西島麦南（にしじま ばくなん）（1895-1981）

季語<今年藁>で仲秋

嫁入りを見に出はらって家のどか

富田木歩（とみた もっぼ）（1897-1923）

季語<のどか>で三春

16 世紀無名詩人の農民を称えた詩

農民を称えよう 歌と歓喜をもって その真実の徳によって。

農民は誰よりも優れている。

彼らは汗だくの手足で働いて 村、城、町へ 日々の食べ物を運ぶ。

高貴で善き農民 皆の生活は彼らのお陰だ。

最後に「農民画家ブリューゲル」にちなんで日本の農作業と農作物の春夏秋冬を詠んだ句を選んでみました。

畑打つや土よろこんでくだけけり (畑打つ=はたうつ)

阿波野青畝(あわの せいほ) (1899-1992)

季語<畑打つ>で三春

早乙女やよごれぬものは歌ばかり

(早乙女=さおとめ、田に稲の苗を植える女衆のこと。歌は田植え歌のこと。)

小西来山(こにし らいざん) (1654-1716)

季語<早乙女>で仲夏

しののめのしの字に引きし牛蒡かな (牛蒡=ごぼう)

小林一茶(こばやし いっさ) (1763-1828)

季語<牛蒡>で三秋

水が責めぬきし白さよ寒晒

(寒晒=かんざらし、穀物などを寒の水につけ、陰干しにして寒気にさらすこと。それによって長期保存が可能に。)

右城暮石(うしろ ぼせき) (1899-1995)

季語<寒晒>で晩冬

私も詠んでみました。

さんざめく光よ風よ早乙女よ

白井芳雄

季語<早乙女>で仲夏

今回は「ピーテル・ブリューゲル、その絵画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：森洋子

『ブリューゲルの世界』（新潮社）
ISBN978-4-10-602274-6 C0371

阿部謹也・森洋子
『カンヴァス世界の大家 11 ブリューゲル』（中央公論社）
ISBN4-12-401901-7 C0371 P3300E

高橋建編集
『西洋絵画の巨匠 ブリューゲル』（小学館）
ISBN978-4-09-105444-9

宗任雅子
『ブリューゲルの食風景を歩く』（近代文藝社）
ISBN4-7733-3321-9 C0095 P1500E

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

白井明大・有賀一広
『日本の七十二候を楽しむー旧暦のある暮らしー』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1011-6 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F
TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com